

【優秀賞】

寂しがりひのひとでなしたち

増田 花奈（高知県 高知県立中村高等学校 2年生）

ソレは、人ではない。

ソレは、人にはなれない。

ソレを、愛する者はいない。

では、ソレは一体、何の為に？

僕は孤独だった。かつては友人がいなかったわけでもないが、少なくとも現在は一人きりだ。だが、いつまでもこのままというのは寂しい。

だから僕は、僕だけの友を作ることにした。幸いなことに知識はあり、部品もほぼ揃えられたため、ロボットを作るための苦労は少なかった。誰も咎める人はいないので、限りなく人に近づけよう。ちゃんと心がある、生きた親友にしたいから。

このロボットを起動させたらどんな話をしようか。

もうとっくの昔に忘れてきたと思っていた少年のような期待が溢れてやまない。わが子が生まれてくるのを待つ父親の気分、とでもいうのだろうか。だとしたら僕の子であるこのロボットはどのような性格になるのか。僕のような人でなしにならなければいいのだが。

思い立ってから一年半ほどだろうか。ロボットは驚くほど順調に完成に近づいた。見た目はほぼ完璧に、プログラムも八割方出来上がった。ただ、ひとつだけ問題があった。声だ。ほかに人がいない以上、自分の声をサンプルにするしかない。さすがにそれは勘弁してほしい。自分と同じ声と会話というのは、いくら何でもむなしすぎる。仕方なくひと昔前の機械的な合成音声を搭載し、時間をかけて人の声になるようアップデートすることにした。

こうして、容姿も精神も限りなく人間に近いが、声だけが非人間的という、なんとも不思議なロボットが出来上がってしまった。

完成したことを意識すると、途端に疲労感に襲われた。思い返してみると、一年と半年の間、よくこんな無茶をしたものだ。ほぼ不眠不休で作業することが多かったからか、視界がすすんでしまつて周りがよく見えない。体もふらついて気を抜くと倒れてしまふそうだ。

ああ、だめだ。まだ倒れてはいけない。楽しみを後回しにしたくない。せめて、このロボットを起動してから……に。

頭を抱え、項垂れる。やってしまった。ロボットの起動スイッチを押したところまでは記憶にあるのだが、その直後から意識が途切れている。それだけだったらまだよかったのだが、ロボットがいなくなっていた。そりゃあさうだろう。人間に近づけるために、好奇心もプログラムしたのだから、興味がわいたのならそちらに向かつて一直線に進む。僕が気を失ってから、どれだけ時間がたったのか分からないから何とも言えないが、そう遠くには行っていないと思いたい。

久しぶりに研究所の外に出てみると、刺すような日差しが目を

刺激した。これは一年半もの間室内に引きこもっていた体には、少し厳しいものがある。一瞬で汗まみれになってしまった白衣を脱ぎ、そこら辺の木に適当に掛けた。さて、搜索に戻ろうかと足を踏み出そうとすると、何か大きめのものを蹴った感触がした。はて、こんなところに何か置いたのだろうか、足元を見ようと白衣をのれんのようにずらししてみると、ソレがいた。

やけに早く見つかったものだと思つたが、よく考えてみれば至極当然のことではあつた。

おそらく見るものすべてに興味を持って長い間観察していた、あるいは蝶でも追い掛け回していたのだらう。そうしているうちに熱にやられてダウンした。夏場の子供の熱中症とたいして変わらない。

ため息を一つ吐いて、ソレを室内へ運ぼうと抱えたが、すぐに手を放すことになつた。これも当然といえば当然だが、熱い。いくら人間に近づけたといつても、部品には大量に金属を使用してゐる。熱くないはずがない。

さあ、どうしたものか。一応木陰に引きずり込んで見たものの、このまま放置するのはあまり得策ではないように思う。目を離したすきに再起動して、どこかへふらふら行ってしまふ……などということもおおいにあり得る。ポリポリと軽く頭を掻き、観念して、またため息を一つ。ロボットを裏返し、予備電源のスイッチを入れる。やれやれ、記念すべき最初の会話にロマンも何もないじゃないか。

眠りから覚めるようにソレはゆっくりと瞼を開けた。

「おはようゴザイマス。初めまして。」

分かつていたことではあるが、やはり実際に聞いてみると残念感がたまらない。見た目は完璧なのに、声がどうしても、ソレが

人間であると認めることを拒んでいる。まあ、仕方のないことかとあきらめ、ロボットの方へ向き直る。

「はい、おはよう。気分はどうかな。」

そう質問してみると、しばらく悩んでいるような様子で首をひねって、

「少シ、暑いでス。」

と笑つた。

「そうか、うん。そうだよなあ。じゃあ、一度研究室の方に戻ろうか。」

「はい。」

木陰にいたことで、多少マシな温度になつた、ロボットの手を引いて僕の本来のテリトリーである室内へ戻る。普段とは比べ物にならない量の汗を吸つたハンカチを、空いている左手に握りしめて。

急激に体が冷やされていく。暑い外から冷房の効いた室内に入った時の醍醐味である、この感覚を噛みしめながら、ロボットを椅子に座らせ、向かい側に僕も座る。何か話したいが、何を話したらいいものかと口を結んでいると、

「アの。」

と声をかけられ、僕の体は小さく跳ねた。

「な、なんだい？」

声が裏返つてしまつた。我ながら情けない。

「先ほど訊くことガできレバよカつたのデスガ、貴方のことハ何と才呼ビすれば良いノデシヨウカ。」

唐突だった。本当に、申し訳なさそうに俯きながら言うものだから、余計に驚いた。だって、まだ何を話したわけでもない。だというのに、呼び名を気にするほど、僕に対して興味を持つてく

れていることが、とても嬉しかったのだ。まあ、後で冷静になって考えてみれば、ただ不用意な呼び方をしないように遠慮してくれていたのかもしれないが。

「アの。」
「ああ、ごめん。ちゃんと聞こえてはいるよ。ただ考え事をしていただけだ。」

返事が遅く、不安にさせてしまったようだ。気を付けよう。

「そうだな……もう家族もいないから、名前で呼ばれるのも気恥ずかしいし、シンプルに博士とかかな。まあ、君が呼びやすいように呼んでくれたら構わないよ。」

「はい、では博士ト。」

なんだか少しご機嫌になったような気がする。さつきまで暑さで倒れていたのに元気なことだ。見れば見るほど普通の子供みたいでほほえましい。うん、ほほえましいのだが。見た目は中性的な大人をイメージしているせいで、どうにもアンバランスになっている。これからの成長に期待、といったところか。果たして、ロボットが成長するかは謎であるが。

ロボット、か。

「そういえば、まだ君の名前を決めていなかったね。どんな名前がいいかな。」

「できレバ、博士ト決めてもらエたら、嬉しいでス。」

即答されてしまった。ネーミングセンスに自信がないから、変な名前を付けてしまうかもしれない。そんなことで傷つけてしまうのは避けたい。

「少し待っていてくれるかい。」

悩んだ末に絞り出した言葉だった。ロボットはにこやかに承諾してくれた。

ありがとう、と一言だけ伝えてロボットの電源を切る。時間をかけてでも、いい名前を与えてあげたい。もしかすると僕からあげられる唯一のプレゼントかもしれないのだ。押入れの奥にあった命名辞典を引っ張り出して、どれがいいものか、どんな意味を持たせたいか、なんて考えながら、ページとにらめっこをしていた。

やっと勝負がついた、もとい良い名前が決まったと満足したころには、すでに日付が変わっていた。彼を一瞥して、今すぐに伝えたいとはやる気持ちを抑えながら、おやすみ、と声をかける。今日の二の舞にならないようしつかり休まないと。

灯りを消した自室で、時計の秒針の音だけが、夜明けを急かす様に鳴り続けていた。

カーテンを閉めるという習慣が必要ない自分にとっては、朝日がそのまま目覚ましになっている。今日も同じように起き上がったのだが、ひとつだけ違うのは、それ以降の動作が自分でも驚くほど速かった。楽しみゆえに慌てるのは、僕も彼のこととは言えないほど子供じみている。昨日自分を父親と評したばかりだということに、なんとという皮肉だ。

あたふたと動き回って一時間。命名式の準備が完了した。片づけは苦手だが、床が見える程度には掃除した。彼の電源を入れようと伸ばした指が、緊張で震えていた。

大丈夫、きつと喜んでくれるはずだ。意を決してスイッチを押し、腕を下す。彼が眼を開けるまでの時間が、やけに長く感じた。

「おはようゴザイマス、博士。わたしノ名前ハ決まりマシタカ？」
「おはよう。もちろん決まったとも。喜んで貰えるかどうかは別だがね。」

すう、と息を吸う。思っていたよりもずっと、自分の呼吸は浅

く小さなものだったが、今まで感じてきたどの空気よりも、清々しいものだった。

彼の透き通った眼をしっかりと見つめ、息を吐く。

「アルマース。」

反応を窺おうとしたが返事がない。もしやうまく舌が回っていなかったのだろうか。いや、センスのなさで失望して何も言えないのか……

だが、彼は固まっているわけではなさそうだった。唇がかすかに震え、何かを訴えようとしているように思えた。

しばらくの沈黙の後、彼はゆつくりと音を発した。

「アルマー、ス。アルマース……」

言い慣れない言葉を練習する、というよりは、どこかその響きを愛おしむかのように繰り返し口にしていた。その様子を見て、感想を聞く必要はなさそうだと僕は安堵する。

「博士！」

「何かな？」

彼は先ほどの僕を真似てか、大きく酸素を取り込む動きを見せた。そして僕の方に向き直り、これ以上ないほどの極上の笑顔で、「ア리가トウござイマス！」と言ったのだ。

それからの日々はあつという間でした。わたしたちは数十年、慎ましくも自由に暮らしました。わたしは博士からたくさんこのことを学び、たくさん話を聞きました。

博士はあの日以来、わたしの電源を切ることはなく、まるで普通の人間の家族のように団欒を楽しみました。博士が食事をしたなら、向かいに座って真似をしました。博士が眠ったのなら、わ

たしも椅子に座って目を閉じました。

わたしたちはあの日を、博士の友人、アルマースの誕生日として、毎年その日が近づくとたび盛大に祝い、機械音声のアップデートを重ねました。今ではすっかりヒトの声に近づき、それに倣うように、外見に見合った精神性も獲得しました。

わたしはそれがとても誇らしかった。博士の隣で、成長していることが何よりも幸福なことでした。

幸せがあれば同じ重みをもった不幸が訪れる。理解も、覚悟もしていたつもりでした。機械が時とともに成長していったように、人である彼は時とともに老いていきました。そもそも、博士はわたしを作るために無理をしすぎていました。体はとうに限界を超えていたのです。

もう一人で起き上がることもできない博士は、ベッドに横たわりながら、わたしに語って聞かせました。彼がひとりきりだった時のこと、わたしを作り上げた理由、二人で過ごした日々が、どれほど彼にとって大きな意味を持っていたか。そして、私が何よりも聞きたくなかった言葉を。

「アルマース。僕は君を男、女のどちらともとれる容姿にした。何故だかわかるかい？」

「さあ、性別で意識しなくなかった、とかですか？」

「うん、おいしいね。自分でもどうかと思っただけけど、君をどうしても人間にしたいくなかったんだ。」

「それではおかしくないですか？前に言っていたじゃないですか。どうせ誰も咎めないから、わたしを限りなく人間に近づけたって。」

「そうだね。確かにそうだ。でも人間の友が欲しいなら、クローンでも作ってしまえばよかったんだ。誰も、咎めないのだから。」

妙に言葉が濁っていました。知られたくない秘密を隠すように。あるいは、かつての過ちは恥である、と誰かを叱るように。

「とてもわがままな理由で、人間を信用できなかつただけなんだ。コミュニケーションがとりやすいから人に似せたが、人間でないことを意識するために、極端に美形であるように作った。よく言うだろう、人形のように美しいと。」

人形。ヒトガタ。人の似せ物。偽物。

そんなイメージが脳を、いや作られた思考回路を駆け巡っていききました。

「待って、やめてくれ。そんな風に俯かないでほしい。これはただの老人の戯言なんだ。君のことを傷つけないわけじゃないのに、ああもう、どうして！」

そこで彼は、一度言葉を切りました。切らざるを得なかつたのです。老いた体が感情の昂りについていけず、悲鳴を上げているのがわかりました。

「博士、無理はしないでください。わたしは気にしていませんから。」

素直な気持ちでした。苦しうに顔をゆがめる姿を見たくありませんでした。それでも博士は構わないという風に手を上げ、

「いいかい、アルマース。君は、ひとじゃない。だが、僕の、唯一人の親友で、家族なんだ。君が生まれてから、ずっと僕は幸せだった。」

お願いだからもう喋らないで下さい。息も絶え絶えになっていくのに、その先の言葉が想像できてしまうのが、嫌で仕方ありません。

「さようなら、アルマース。君は、もう自由だ。」

初めて告げられた言葉でした。

涙は、出ませんでした。

初めてこの体を憎いと思いました。

博士が亡くなってから、彼の自室は何もかも止めました。わたしも、あれ以来立ち入ってはいません。別れを告げられた以上、もう、彼の部屋に行くべきではないと判断したのです。

ある日、一枚の写真を見つけました。知らない場所で、まだ若い博士が笑っていました。博士と知らない誰かが、肩を組んで笑っていました。

なぜ、私は今まで疑問に思わなかつたのでしょうか。彼はかつて「友はいた」と言っていたのに、その友人は一度もここを訪れていません。そういえば、一人でいた理由を、彼は一度も語ってくれませんでした。

興味がわいてからは、早いものでした。思えば、自分から行動するのは初めて起動された日以来かもしれない。装備を整え、丘の向こうに行くことにしました。

辿り着くのに時間はかかりませんでした。

街はすでに荒廃しており、建物はすべて廃墟となっていました。無論、人のいる気配など微塵もなく、電光掲示板だけがむなくしく点滅していました。

『我らの愛する故郷よ、いずれまた』

『宇宙コロニー完成！方舟出発まであとゼロ日』

そんな、わたしの嫌いな別れの言葉で、この街は、この世界は満ちていました。この場所を見て、博士がひとりでいた理由がわからないはずがありません。彼がわたしを作っても咎める人がいないのは当然です。文字通り、居ないのですから。

激しい憤りを感じました。同時に、彼が人を信じられなかったことにも納得しました。

意識されていなかったとしても、結果的に彼らは博士を人柱にして、そのまま忘れ去ってしまったのです。

ああ、でも。

ごめんなさい、博士。理解はしましたが、わたしには彼らを憎む権利はありません。彼らと貴方がともにいたなら、私はこうしてここにいなかった。

それに彼らは、いずれまた、と残していました。わたしも一人は寂しいのです。いつまでかかるかわかりませんが、彼らを待つてみようと思います。博士はわたしに、もう自由だと言ってくれたのですから、わたしは自分のために、誰かの手をつかんでも構わないのですよね。

返事はあるはずもないけれど、風は通り抜けていきました。

もう左手に戻ることにない感触を思い出しながら、わたしは家路につきました。

わたしは、人ではない。

だが、人とともに在りたい。

わたしは、人にはなれない。

だが、それでも構わない。

わたしを、愛する者はいない。

だが、いずれやってくる。帰ってくる。

だから、わたしはひとつの願いのために。

少しだけ長い、夢を見よう。

地球が文化遺産として登録されてから、宇宙コロニーでは、地球観光が流行し、数々の旅行プランが組まれた。近年では、修学旅行先に地球を選ぶ学校も多い。

地球は、荒れ果てていながらも、確かにかつての賑わいを取り戻していた。

街から離れた丘に向かう、観光客の一団がいた。彼らは歩き続けるうちに、小さな白い建物を見つけた。そして、彼らは好奇心のままに建物を探索し始めた。

整理された部屋が多い中で、一部屋だけやけに生活感のある荒れた部屋があった。そのベッドにはかつてのこの建物の持ち主であろう遺体があったが、すでに白骨化していた。

彼らは、誰とも知れぬその人に哀悼の意をささげ、その場を後にした。

やがて彼らは、ある部屋にたどり着いた。日が柔らかく差し込む小さな部屋。その部屋に、人間によく似た、けれど、とてもそうとは思えない美しさを持った誰かが、目を閉じて椅子に腰かけていた。彼らは不思議な魅力にひかれてソレを眺めていると、スイッチの様なものを見つけた。一人が恐る恐る指で押し、全員が息をのんで見つめる。

ソレはゆつくりと瞼を開き、微笑んだ。

「おはようございます。初めまして。」